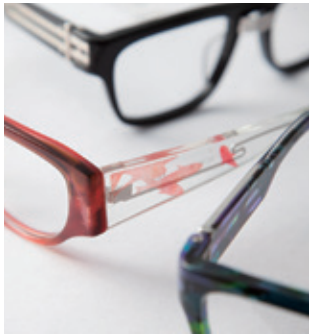




金沢美術工芸大学 社会連携活動のあゆみ
未来へ繋ぐ **248** のプロセス

序

はじめに

美術・工芸・デザインそして芸術学まで、金沢美術工芸大学には蓄積された専門知識や技術があります。その有形無形の資産を広く還元し積極的に社会貢献を行うことは、教育と研究に並ぶ大学としての使命であり、実践的に社会に寄与できる人材育成にも繋がります。

本学における社会連携事業は、2007年度に設置された地域連携、産学連携、知的財産管理の3部門から成る社会連携センターで統括しており、産業界や行政機関をはじめとする各種連携機関とパートナーシップを深め、さまざまな研究や情報の提供・交流を推進しています。

タイトルに掲げた248という数字は、2007～2018年度までの事業実績です。本冊子では最新事業から4つにフォーカス。それぞれが独立したプロの作家、デザイナー、研究者であり、年齢、経歴、ネットワークもさまざまな教員と共に才能あふれる学生たちがキャンパスを飛び出し社会と繋がりながら活躍する姿をご紹介します。本学連携事業の体制や綿密なプロセスそしてハイレベルな研究に理解を深め、今後の活動に関心を寄せていただくきっかけになれば幸いです。

学生の主体的な 学びの場としての 社会連携

金沢工芸美術大学 学長 山崎 剛

金沢美術工芸大学は、戦後間もない1946年、学問を好み、伝統を愛し、美の創造を通じて人類の平和に貢献することを希求する金沢市民の熱意により、「工芸美術の継承発展、地域文化と産業の振興に寄与する」という目的を掲げて開学しました。大学憲章には、「素材を知り、技を磨き、現代に生きる表現に高めるべく “ものづくりの精神” を尊び、幅広い人間性に裏付けられた理論と技術の彫琢をとおして、芸術が社会に果たす役割を自ら探し行動する人材を育成する」と謳っています。「芸術が」という主語のもとで、「社会に果たす役割を自ら探し行動する」ことが、私たちに託された使命です。

開学以来、本学は地域に在って地域に活かされる大学として様々な社会貢献活動を行ってきました。そして2007年度には、地域連携・産学連携・知財管理を統括する社会連携センターを開設し、この社会に対して開かれた窓口を通して数多くの依頼をいただき、私たちも、「人に夢を。地域に活力を。ビジネスに未来を。」という想いを胸に研究を受託し、教職員と学生が協働して実施してきました。

本学では社会連携を「学生の主体的な学びの場」と位置付けています。勿論、他機関との連携による共同研究や教員が実施する受託研究もありますが、大半は教員とともに意欲のある学生たちが主体的に参加し、研究に取り組んでいます。例えば、一般社団法人福井県眼鏡協会との連携は、もとをただせば “メガネ部、” というクラブ活動に端を発し、2003年から長期にわたって継続している研究で、商品化の実績もある名物事業です。また、金沢市立病院との連携により医療におけるアートの可能性を探求するホスピタリティアート・プロジェクト(HAP)も11年前にスタートしたもので、今や地域における夏の風物詩となっています。この他にも、金沢マラソン完走者メダルのデザインなど、学生から学生へ、代々引き継がれて続く事業も、本学の社会連携の特色と言えるでしょう。

実社会に学生が触れる貴重な機会として、そして、大学の高度な研究を活用していただく機会として、本学は今後も社会連携を適切に行ってまいります。なお一層のご理解とご協力をお願い致します。

金沢美術工芸大学の社会連携活動

大学における社会連携活動とは

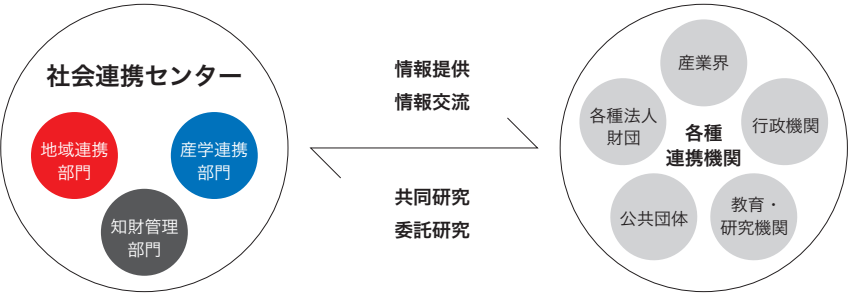
金沢美術工芸大学 社会連携の理念

金沢美術工芸大学は社会貢献を、
教育と研究に並ぶ大学の使命と位置づけ、
地域連携・産学連携を通して積極的に社会貢献を行います。

- 1. 本学の持つ美術工芸分野の専門知識や技術、社会連携で得られた成果を広く社会に還元します。
- 2. 地域の産業と積極的に連携を図り、地域社会の活性化に貢献します。
- 3. 社会との連携活動を体験することで、より実践的に社会に寄与できる人材を育成します。

連携について

他大学・研究機関とのパートナーシップを深め、実現性の高いハイクラスの研究を推進します。



金沢美術工芸大学における社会連携活動とは

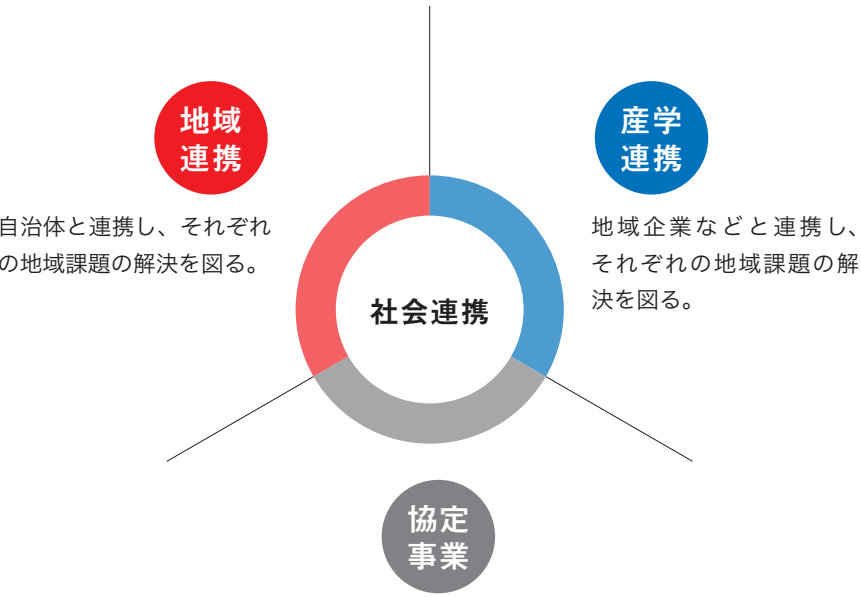
学生1000人当たりの開発した商品・サービス数ランキング

順位	大学名	国公 私別	都道府県	件数	1000人あたりの 開発商品数
1	金沢美術工芸大学	公立	石川県	21	33
2	和洋女子大学	私立	千葉県	70	28
3	名古屋文理大学	私立	愛知県	18	18.3
4	松本大学	私立	長野県	24	16.2
5	宇都宮大学	公立	栃木県	46	11.1
6	京都嵯峨芸術大学	私立	京都府	5	10.2
7	長野大学	私立	長野県	11	8.8
8	小樽商科大学	公立	北海道	19	8.3
9	東京造形大学	私立	東京都	14	7.9
10	東京工芸大学	私立	東京都	32	7.4

出典:日経グローバル No.282 2015 12/21 大学地域貢献度調査から

当大学が専任のコーディネーターを配置した社会連携センターを設置したのは2007年度。大学の窓口を一本化し、本格的に受け入れ体制を整えました。2019年度で13年目になりますが、その間に教員が持つ企画力、創造力、美学・美術史に関する学術の力を基に、学生の感性と情熱が反映されたデザインが次々と生み出され、全国でもトップクラスの実績を残しています。

これからも「人に夢を。地域に活力を。ビジネスに未来を。」という想いを胸に、教職員と学生が協働して連携活動に邁進します。



社会における大学の役割と連携活動

1947年(昭和22年)に制定された教育基本法が2006年12月に改正されました。制定から半世紀以上が経過しており、当時とは国際情勢の変化やそれに伴う日本の教育環境も大きく異なるため、教育の普遍的な理念はそのままに現代社会にあわせた内容となったのです。その中には改正前には無かった「大学」の項目が新たに設けられ、「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。」と明示されており、大学が持つ大きな役割として「学術の研究」、「人材の育成」、「社会貢献」が位置付けられています。この「社会貢献」が大学の役割として位置づけられたことは、大学が自発的かつ能動的に社会とつながり、社会形成の一端を担う役割を求められたということになります。

その後、2012年には、「大学改革実行プラン」が策定され、その柱のひとつに「地域再生の核となる大学

づくりCOC(Center of Community)構想の推進」が掲げられました。現在はそのさらに発展させた「地(知)の拠点大学による地方創生事業(COC+)」へと取り組みを変え、社会貢献の中でも地域貢献へ踏み込んだ内容となり、地域の大学・自治体・企業などとの連携を今まで以上に強固にすることを求められています。

大学が期待されているのは、地域の魅力や経済的効果を高める為、地域の産業・技術のイノベーションを創出することや、COC、COC+の事業の主目的である地元社会に貢献すること、そして、本来の大学がもつ教育の視点である学生が自らの人生を主体的に切り拓く能力を磨き、社会に必要とされる人材育成を担うことです。

各大学それぞれの特徴や研究の強みを活かして社会や地域が持つ問題・課題を、学生が学びながら共に解決していくというひとつのあり方として社会連携活動は位置づけられており、大学が地域に貢献できる重要な活動となっております。

4 社会連携事業のプロセス

金沢美術工芸大学が社会連携センターを設立したのは2007年度。

設立から2018年度までの12年間で、地域連携事業を127件、産学連携事業を121件、合計248件の実績を積み上げてきました。

ここからは最新の2019年度 社会連携事業から4つにフォーカスし、社会連携としての取り組みの詳しいプロセスやプロジェクトの舞台裏を紹介します。



金沢マラソン完走者メダル



メガネ部活動としての連携事業



みんなの思い出 黒板アート



ホスピタリティアート・プロジェクト「光の回廊」

CONTENTS

03 学長あいさつ

04 大学における社会連携活動とは

05 金沢美術工芸大学の社会連携活動

06 CONTENTS

07 社会連携事業

金沢マラソン完走者メダル

メガネ部活動としての連携事業

みんなの思い出 黒板アート

ホスピタリティアート・プロジェクト「光の回廊」

41 社会連携センター歴代運営構成員名簿

42 History 248

社会連携センターのあゆみ 2007-2018



Process

地域連携事業

金沢マラソン完走者メダル

金沢マラソン 完走者メダルデザイン 制作過程

ランナーに金沢らしいメダルを贈る

金沢マラソンは2019年で開催から5年、金沢の魅力を満喫できるフルマラソンとして大変人気の高い大会となっています。開催初年度の2015年から完走者メダルのデザインを本大学の製品デザイン専攻3年生の有志が提案しており、金沢マラソンらしいデザインでランナーにも大変好評をいただいています。

01 金沢マラソン メダルプロジェクト始動

金沢マラソン完走者メダルデザインコンペティションに参加する有志を集い、オリエンテーションがスタート。浅野隆教授から、趣旨の説明を受けます。委託先の金沢市役所金沢マラソン推進課からの要望は「金沢らしいデザインであること」です。



02 アイデア 学内検討会

浅野隆教授と学生で、アイデアの検討会を行います。プレゼンテーションに向けて、自身のアイデアがコンセプトに沿っているか等を確認します。



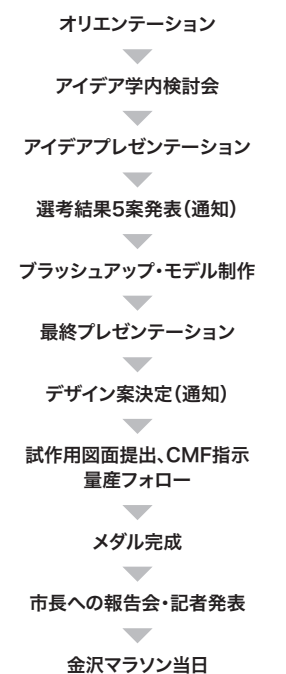
03 アイデア プレゼンテーション

金沢マラソン推進課へ向けてアイデアプレゼンテーションを行います。2019年は10名がこのコンペティションに参加し、デザイン案は全部で16案。ひとりひとりメダルデザインに込めた思いを発表します。



2019年のコンペティション参加者達

プロジェクトの流れ



04 選考結果5案発表

第1回アイデアプレゼンテーションから5案に絞られます。選ばれた5案の制作者はデザインの修正依頼を受け、今以上にデザインの質を上げるため、最終プレゼンテーションに向けてブラッシュアップします。



2019年の最終5案

05 モデル制作

金型の設計が可能であるか、コストに見合っているか等、現実的にメダルを製造することを踏まえてデザインを見直し、実物大のモデルを制作します。



2019年の最終5案 実物大モデル

06 最終プレゼンテーション

金沢マラソン推進課の方へ向けて最終プレゼンテーションを行います。その際に3Dプリンタ等で制作した実物大のモデルを提出。この中から、金沢マラソン完走者メダルが選ばれます。



2019年の最終プレゼンテーション参加者

完成

金沢市からメダル案決定の通知後、量産のための検討をメダル作成業者と行います。後日、市長への完成報告会があり、メダルのお披露目です！



金沢マラソン当日、完走したランナーの首にメダルが光ります。2019年は、メダルデザイナーの藤島さんも完走ランナーにメダルを渡すボランティアに参加しました。

金沢マラソン2019 完走者メダルデザイン 最終選考通過者に聞く、その先で見たもの

金沢マラソン組織委員会と連携して行っている、完走者用メダルのデザイン。
年々、クオリティが上がる中、見事ファイナリストとなった4人にプロジェクトを振り返ってもらった。

——第1回大会から毎年、製品デザイン専攻の3年生の有志から募ったデザインを採用している完走者メダル。今回、皆さんがコンペに応募した動機を教えてください。

藤島 プロジェクトを知ってすぐ参加を決めました。自分が考えたものが、1万人以上の人に渡されるチャンスなんてそうはありませんから。

水野 僕は先輩がコンペに取り組む姿を見たのがきっかけ。学生の間に社会に出るものをつくることに憧れました。

菅沼 社会人になってもメダルをデザインする機会はないだろうなと思って、挑戦しました。

澤本 これまでデザインが採用された4名の先輩は皆県外出身者。そろそろ、地元も頑張らなくてはという気持ちもありました。

——デザインの着想はどこから？

水野 与えられたテーマは「金沢らしさを感じるもの」。県外出身の僕は豊富な知識がある訳ではありませんが、だからこそ知っていることを素直に表現しようと、街のシンボル

である鼓門をモチーフにしました。
菅沼 メダルデザインの説明を受けた際、「リボンもメダルの一部」という言葉が強く印象に残りました。そこから、メダルとリボンを一体化する案を考え、水引のあわじ結びにたどり着きました。

藤島 今までの4回とはまったく違うイメージにしたかったんです。雨や雪というどちらかといえばネガティブなイメージに爽やかな青を組み合わせたものと、人と人を結びつける水引で祝いの意味を持つ梅をかたどり格調高い群青色をポイントにした2案を提出しました。

澤本 私がモチーフに選んだのは、昔から実家にあつた加賀手毬。嫁入りする娘に持たせて幸せを願うという風習があると聞いていたので、マラソンに参加する方々にもそんな温かい気持ちが届いたらいいなと思って。

——制作過程で苦労や発見はありましたか？

水野 メダルはある程度決まった規格があり、その中でできる限りの工夫をします。しかし、リボンのグラフ



最終選考に残った5案のメダルモデル

イックデザインは無限。どこまでやるかという線引きを自分でするのが難しかったですね。
菅沼 首から提げた時もロゴがきちんと見えるようにとか気遣うことも多くて、メダルよりリボンの方が思い入れは強いかもしれません。
浅野 今年は、色やリボンのデザインという視点からも目新しさを感じる案が多かったように思います。第5回という節目の年にふさわしい、未来に向けての変化を感じるものに



金沢マラソン 2019
完走者メダルコンペティション ファイナリスト

INTERVIEW

ファイナリスト4名 & 担当教員

澤本泉美 × 菅沼佑哉 × 藤島佳那子 × 水野和真 × 浅野隆
製品デザイン専攻3年 製品デザイン専攻3年 製品デザイン専攻3年 製品デザイン専攻3年 デザイン科 製品デザイン専攻教授



Sawamoto Izumi



Sugauma Yuya



Fujishima Kanako



Mizuno Kazuma



Asano Takashi



なりました。

藤島 コストについて考えたのも初めてでした。

水野 コストに関係する体積やサイズの規定には多少苦労しましたが、求められるものをつくれたという達成感がありました。

澤本 製造を担当する会社の方からの提案で、量産方法はひとつではなく、アイデア次第で可能性が広がることを学びました。驚いたのと同時に、この柔軟な考え方は社会に出た時必ず役に立つなと感じました。

浅野 クオリティとは考えることなんです。試行錯誤することでオリジナルティのあるデザインが生まれる。他県でもメダルデザインに力を入れているところは沢山ありますが、どこにも絶対に負けたくないですね。

——このプロジェクトを通して感じたことは？

菅沼 メダルが形になるまで、どれだけの人がどう関わっているのかという全体像を知ることができたのがよかったですね。

水野 形になることが前提にあった

菅沼 僕も金沢のイベントにこまめに興味を持つのは初めて。

澤本 県外からもたくさんの方が来るので、みんなが金沢を楽しんでくれるといいですね。

藤島 完走した方々だけでなく、疎遠になってしまった同級生や友達ともこのメダルをきっかけにまた繋がれるといいなと密かに楽しみにしているんです。

浅野 そういう気持ちを持つことも立派な社会貢献ですね。社会連携は金沢美術工芸大学が市民の大切な税金で育てられていることへの恩返し。一方、学生にとっては、3年生という大学生活で一番伸びる時期に、社会へアプローチすることで自分の伸びしろを増やすという大きな意味があります。企業はこれから成長する人を求めており、そのために必要な言われたことをやってみる素直さ、その中で自分らしさを出す表現力、よりよいものをつくる判断力を身に付ける絶好の機会です。ランナー、市民、学生の関わりをより深くするこのプロジェクト。これからの意図と意義を伝え末永く続けていきたい

ので、工程まで考えながらデザインしたことも勉強になりました。

澤本 今振り返ると、2年間プロジェクトデザインの基礎を学んだからできた経験だった気がします。

藤島 確かに、コンセプトを立てて、スケッチを描いて、デザイン、モデルづくりと手が勝手に動いて迷いなく次の工程に進めた感じ。1年生の時だったなら、何から始めればいいのかさえ分からなかったかもね。

浅野 自分では気付いていないだろうけれど、1年生の頃からレーザーカットや塗装、ものを分解したり金型をつくってみたりとにかく手を動かしてきた。その経験が基礎となつてデザインのバランスや色に表れるんです。手間をいとわない人でないと美しいものはつくれないということだね。

菅沼 私は常々、この大学を選んでよかったと思っています。木を削ったり、金属を溶接したり、色を塗ったり。自分の手でゼロから何かをつくる指導を受けてきたことが自信になつています。

水野 いつもつなぎの作業着だし、

と考えています。

菅沼 これまであまり行く機会がなかったこともあり、市役所で職員の方々とプレゼンできたことも貴重な体験でした。

水野 普段から授業の前には必ずプレゼンやディベートをしているので、発表自体は緊張せず自分の考えを伝えることができたと思います。

手も真つ黒だけだね。

藤島 SNSでキラキラした友達を見るといいなとも思うけれど、無心でやすりがけをしている時ふと「私、いい大学生活を送っているな」と感じることもあるんです。自分の環境を誇れるって素晴らしいことですよ。

菅沼 金沢マラソンの他にも社会連携プロジェクトがたくさんあつて、学生のうちからさまざまな経験ができる場所も金沢美大のいいところ。

水野 チャンスが多いのは、ありがたいですね。僕がこの完走メダルデザインを絶対にやろうと決めて3年生になるのを心待ちにしていたように、学生生活の励みにもなっていると思います。

澤本 大学の課題と違って、製品化されるかもしれないというワクワク

感や製造工程など未知の世界を知る刺激があるのもいいですね。

藤島 今回、自分のデザインが採用されたことで、金沢マラソンに出場する友達や知り合いが完走メダルをかけているところを見たいという気持ちに日に大きくなつていきます。

水野 ポスターが自然と目に入ったりして、待ち遠しいよね。



金沢マラソンメダル委託者 INTERVIEW

金沢らしいおもてなしをカタチに 美大生デザインの完走者メダル



東 利裕 氏

金沢市 文化スポーツ局 スポーツ部
担当部長（兼）金沢マラソン推進課長
（金沢マラソン組織委員会事務局次長）

1万3000人のランナーが晩秋の金沢を駆け抜ける「金沢マラソン」。第1回大会から行っている金沢美術工芸大学と連携した完走者メダルの制作は、市を挙げて学生のまち・金沢を推進していることから、学生にも大いに活躍してもらい若い感性で大会を盛り上げてもらおうと始まったものです。

完走者メダルは、ボランティアや市民との交流、趣のある景色、おいしい食事などと並んで大会の印象を形づくる大切な要素。これまで制作したどれもが、美大生ならではのセンスで金沢を表現しており「思い出に残る」と大変喜ばれています。「京都マラソン」や「名古屋ウィメンズマラソン」など

で出展しているPRブースでの歴代の完走者メダル展示も好評で、ランナーや各地のマラソン大会関係者からお褒めの言葉をいただくことが多く、その度に誇らしい気持ちでいっぱいになります。毎年、これ以上ないと思えるメダルが完成するのですが、翌年にはさらに良いデザインが生まれるレベルの高さはいつも感心させられます。

私たちは、金沢マラソンを金沢百万石まつりに並ぶイベントに育てたいと考えています。そのためには、ランナーはもちろんボランティアや沿道で声援を送ってくださる市民の方々など大会に関わるすべての人が主役になって楽しめる仕組みが必要です。そういった意味でも、金沢美術工芸大学の学生が大会運営に関わってくれる意味は大きく、今後も若い力に期待しています。



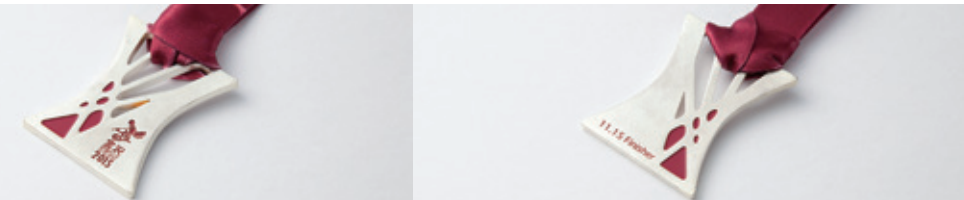
Process **2**

産学連携事業

メガネ部活動としての連携事業

金沢マラソン 完走者メダル コレクション Since 2015▶

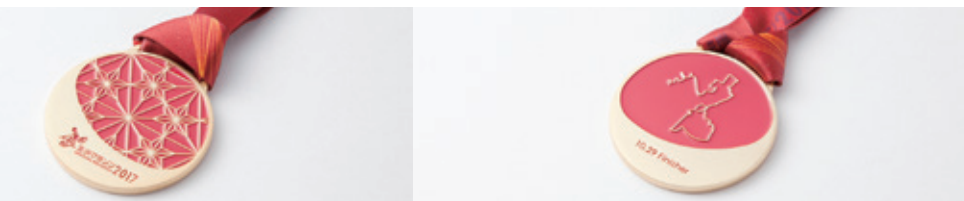
2015



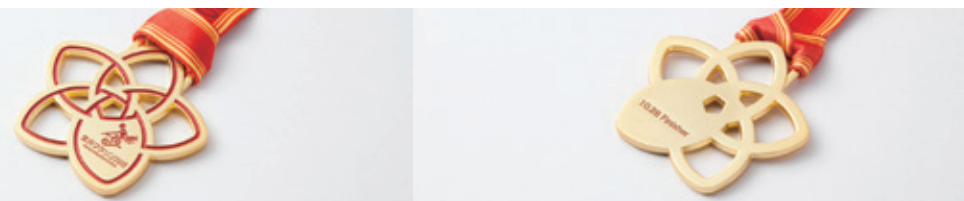
2016



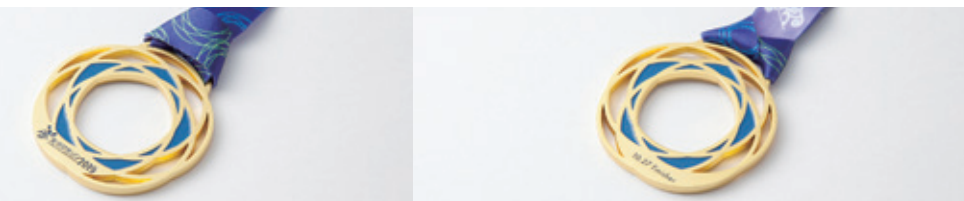
2017



2018



2019



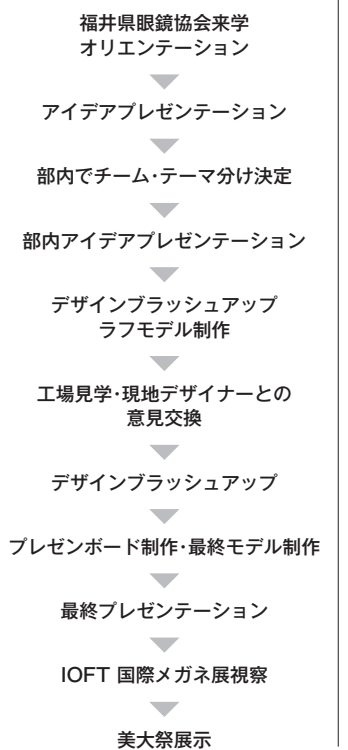
メガネ部 プロジェクトの過程

部活動としてのメガネフレームのデザイン研究

メガネ部と福井県眼鏡協会との産学連携プロジェクトは2019年で17年目を迎えます。学生主体の部活動としての連携活動は他大学では類を見ない取り組みですが、上級生から下級生へ情報の引き継ぎや専門的なデザイン技術指導などの体制がしっかり整っています。

テーマを「自分のかけたいメガネ、あの人にかけてほしいメガネ」と定め、毎年秋に行われる福井県眼鏡協会へのプレゼンテーションへ向けて新しいアイデアのメガネフレームを検討します。

プロジェクトの流れ



01 部員勧誘

メガネ部は部活動のため、4月は部員勧誘から始まります。その後5〜6月頃に福井県眼鏡協会の方が本学へ来て、9月に開催する同協会へのプレゼンテーションについてのテーマや、期待するデザインについて説明を受けるオリエンテーションが開かれます。



02 チーム決定

テーマごとに1年生〜4年生の混合チームにわかれます。上級生からの概要説明や、市場調査などを経てテーマに沿ったデザインを考えていきます。4年生はチームのサポートがメイン。2・3年生も同じチーム内で入学したばかりの1年生のサポートを行います。

2019年 各チームのテーマ

PASSION
パッション

CUTE
キュート

COOL
クール

NATURAL
ナチュラル

03 学内での アイデアプレゼンテーション

顧問の浅野隆教授と部員全員でアイデアの中間発表会を行います。ひとりひとりアイデアをプレゼンテーションし、それに対して上級生や浅野隆教授からアドバイスをもらいます。



04 鯖江の眼鏡工場見学

希望者は8月に福井県眼鏡協会の本拠地であり、めがねの町である鯖江市の眼鏡工場を見学できます。



2019年の工場見学の様子

05 デザイナーとの 意見交換

鯖江市の眼鏡工場見学の際、メーカーのデザイナーに学生がデザインした眼鏡のアイデアスケッチやラフモデルを見てもらい、アドバイスをもらう時間が設けられています。このアドバイスを元に、作品をブラッシュアップ。プレゼンボードやモデル制作を行い、最終のプレゼンテーションに臨みます。



デザイナーとの意見交換の様子



06 最終プレゼンテーション

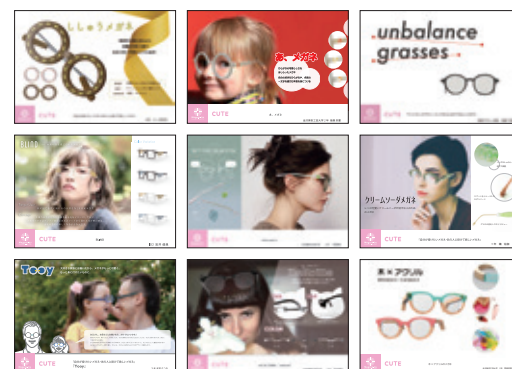
福井県へ外向き、福井県眼鏡協会の役員と協会員に向けて最終のプレゼンテーションをひとり一案行い、当日のうちに最優秀賞、審査員特別賞、チーム賞が発表されます。企業が商品化したい案がある場合、デザインは企業預かりとなり、商品化へ向けて動きます。その後、企業で試作を繰り返すので商品化までには長い時間がかかります。



2019年 最優秀賞作品



2019年 審査員特別賞作品



2019年 チーム賞「CUTE」



2019年2月に商品化された眼鏡の一例

IOFT 国際メガネ展

IOFT 国際メガネ展とは、眼鏡関連製品が一堂に出展する「日本最大の眼鏡専門展」。世界的な展示会で、毎年東京ビッグサイトで10月頃に行われています。会場の福井県眼鏡協会のブース内に金沢美術工芸大学メガネ部のコーナーが設けられ、今年の全プレゼンボードとモデルを展示。世界のメガネ業界の方に見てもらうことができます。



2018年のIOFT 国際メガネ展参加の様子

メガネ部代表

INTERVIEW 8

部活動として産学連携に取り組む メガネ部の活動とは

2003年からの長期にわたり、学生主体の部活動として一般社団法人
福井県眼鏡協会とのデザイン産学連携に取り組んでいるメガネ部。商品
化の実績もあり、学外からも注目を集めるその活動内容と意義につい
て、顧問教授と代表部員4名に語ってもらった。

メガネ部代表4名 & 担当教員

澤本泉美 × 中園悠佳 × 松島望 × 和田さつき × 浅野隆

製品デザイン専攻3年

製品デザイン専攻3年

工芸科3年

製品デザイン専攻3年

デザイン科
製品デザイン専攻教授



Sawamoto Izumi



Nakazono Yuka



Matsushima Nozomi



Wada Satsuki



Asano Takashi

— 入部理由を教えてください。

中園 メガネが嫌いで、入部すれば自分に似合うものがつくれるかなと思って。先輩の「他の人に差を付けられるいい部活だよ」という言葉にも魅力を感じました。

浅野 差というのは？

中園 アイウェアのように身に付けるもののデザインは授業でも考える機会がないので、経験値が増えるという意味だと思います。あと、1年生でもプレゼンに参加でき、商品化を狙えるのもメガネ部の部員だけに与えられたチャンスなので、「差」と言えますね。

澤本 プロダクトデザインに関する知識がまったくない学生にも、商品化の可能性があると聞いて入りました。実は私もメガネが好きではなくて、自分がかけたいと思えるものがほしいという気持ちもありました。

松島 私は、活動内容を察することができないところに興味を持ちました。当時は製品デザイン専攻のみで他学科の学生はいなかったのですが、工芸科所属の私には説明会などの情報

友人を見ていると、とても大変そうで尻込みしていました。

中園 やらないと後悔するよって勧めたんだよね。

和田 そうそう。商品化の可能性があることに関われることは少ないので、忙しいくらいでやらないのはもったいないと考え直して決めました。

— 年間の活動予定を教えてください。

中園 メインは鯖江市にある福井県眼鏡協会へのプレゼンテーションですね。

澤本 始動は5〜6月。夏休みが一番活発に活動する時期で、希望者は産地見学も行います。

和田 私は今年、産地見学に参加しました。メガネの聖地である鯖江の製造現場を見ることができただけでなく、現地のメーカーで活躍するデザイナーに自分たちのデザイン案について意見をもらえる機会もあつて、とても充実していました。

松島 最終プレゼンテーションは9月。そこで、各賞の受賞者が決まります。

浅野 学生の負担を減らすため、最

が届かず気がついた時には受付期間を過ぎてしまっていたのですが、部長に直訴して入部させてもらいました。

浅野 あの時はうれしかった。学部を区切っていた訳ではないけれど、メガネ部を立ち上げたのが製品デザインの学生だった関係で、他学科の部員はいなかったのです。でも、松島さんをきっかけに今では日本画や芸術学の学生もいます。

和田 私は3年生で入部しました。入学時から気になる部活動ではあったのですが、たくさんの課題に加えてメガネ部の作品づくりに追われる

終プレゼンは夏休みに行っているのですが、休暇中も忙しさは変わらないようです。

中園 課題もありますし、今年はインターンのスケジュールと重なって正直きつかったです。

松島 実際、忙しさから途中で辞めてしまう学生も少なくないんです。

— 皆さんが活動を続けているモチベーションはどこから？

中園 1年生の時は私の希望を先輩がカタチにしてくれたようなものだったのですが、2年生になってやっと自分をつくったという達成感を味わうことができ、3年生では部長になった責任感もあつてという感じで、学年が上がるごとに違う目標が見えていたからかな。

松島 1年生の時提案したデザインが先輩のサポートもあつて商品化されることに。それからさまざまなやりとりがあり、実際に発売されたのは昨年12月。それまでメガネ部を離れられないというのもありました。

中園 私も1年生の時、商品化を経験したのですが、発売までにはとて



も時間がかかるんです。いくらデザイン的にこだわった部分でも、品質や量産できるかといった点から変更を余儀なくされることも。残念な気持ちにはありましたが、鯖江の品質に對するプライドも感じ、メガネづくりの奥深さを感じました。

浅野 つくりたい形とできる形は違うという製品化のプロセスを体験できたのはとても良かったね。

動力。でもその経験があつたから、メガネをより冷静に見ることができるようになり、工程や形の工夫もできるようになりました。

つたことも判断できるからね。

だとスーツの時も身に付けられるので“おいしい”ですよ。

より具体的なアドバイスができるようになった気がします。自分が培ってきたものを誰かに伝えられるというのは、産学連携を単発のプロジェクトではなく部活動として代々続けていくからです。

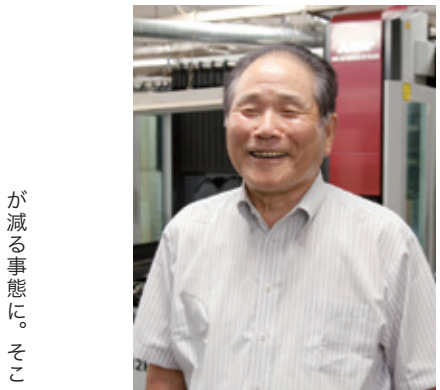
松島 確かに、受け継がれている技

いつもとは違うものづくりに触れることができて視野が広がりました。

和田 金沢美大では多くの産学連携プロジェクトを行っていますが、産地見学やプロとの意見交換といった一歩踏み込んだ活動ができるのは、メガネ部ならではのですね。

メガネ部連携事業委託者 INTERVIEW

学生たちが吹き込む新風が
めがね産地の力になる



長井 正雄 氏
株式会社 長井 代表取締役会長

良くて、どんな活動しているの？つて会話が弾みます。

松島 私は、商品化されたメガネをかけてインターンに参加しています。ものを持っていくことができるのはとても説得力がありますし、メガネ



Process

地域連携事業

みんなの思い出 黒板アート

TECO series (2005) GO2-1 (2010) GO2-2 (2010) GO2-3 (2010)
SOLO-1 (2011) SOLO-2 (2011) SOLO-3 (2012) SOLO-4 (2012)
粹 (2019) Grace Glasses (2019)



金沢美術工芸大学メガネ部 商品化コレクション Since 2005▶

みんなの思い出 黒板アート制作過程

金沢の魅力を伝えるアート

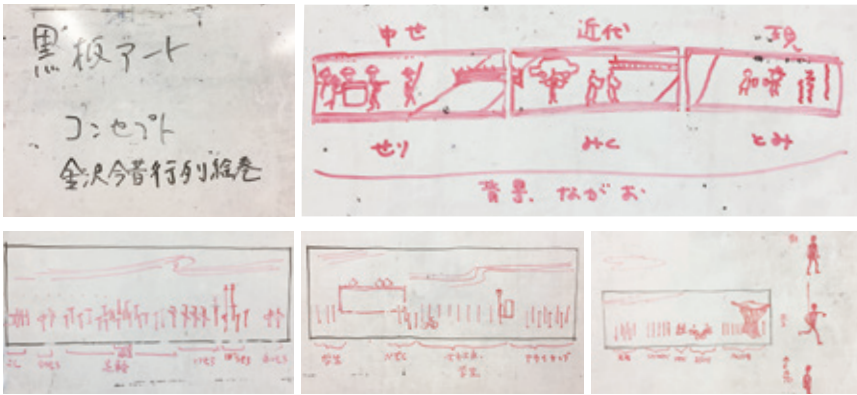
閉校となった材木町小学校の黒板を使用し、金沢を活性化するアートイベントはできないものかと昨年開始された黒板アートプロジェクト。金沢駅で黒板アートの公開制作を行い、おもてなしの気持ちを伝えるという意義も盛り込まれています。黒板による画面の大きさは縦1.2m×横10.8mに及び、観光に訪れた方や市民の皆様にアートを通じて金沢の魅力を発信します。

01 打ち合わせ コンセプト会議

市役所の担当者と打ち合わせを行い、黒板アートの趣旨確認や、大まかなコンセプトを設定します。その後、メンバーで集まりどのような絵を描いていくか相談します。

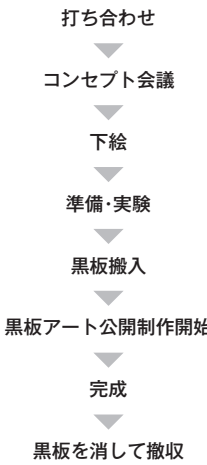


市役所担当者との打ち合わせ



メンバーでのコンセプト会議

プロジェクトの流れ



02 下絵と準備

コンセプト会議で決めた大まかなラフをもとに、より具体的に黒板に描く絵を書きおこします。今回のメンバーはデジタルで下絵を制作。
黒板という横長で濃いグリーンキャンパス、画材はチョークと普段学んでいることと全く違う描き方になるので、学内で黒板にチョークで描くようになるのか、様々な技法を実験して本番に臨みます。



デジタルで描かれた下絵

03 金沢駅に黒板設置

金沢駅東もてなしドーム地下広場に黒板を設置。黒板アート公開制作の準備が整います。



04 黒板アート 公開制作開始

黒板アートの公開制作がいよいよスタートです。制作期間は7日間。
塗ったものを消すという黒板の特性を活用し、人物などは型を使用して背景色を消してから彩色する方法で挑戦。



金沢駅という場所柄、観光客の方に見つめられながら、もくもくと作業を進行。公開制作ならではの光景。



たまに、見学者に話しかけられることも。これも公開制作ならではの光景。



完成

完成した黒板アートは1週間の展示期間の後、学生自らが黒板を消して、幕を降ろします。黒板なので、消すという最後にこだわったアートイベントのプロジェクトです。



公開後、絵を消している様子

INTERVIEW

黒板アートという表現

制作過程から作品を消すまで活動のすべてを公開し、金沢市の活性化に繋げるみんなの思い出黒板アート。
通算5作目の制作を担ったのは、修士課程油画コースの4名。3面横並びにした縦1.2m×横10.8mの黒板に、これまでにない図案や技法で新たな世界観を持つ「金沢今昔行列絵巻」を完成させた。



長尾 黒板の横に長い形を生かして絵巻物風にしたら？という案に、「かわいい！」と全員一致で賛成して、めざすイメージも固まっていきました。

館田 私たちの個性が出しやすいような昔の写真は模写しませんでした。これまでとは違うことをやりたいという気持ちもあったと思います。

——制作過程での思い出や苦労はありますか？

棚部 最初の壁は下地の色。全体の雰囲気を決める重要な要素なのに、チョークで塗りつぶしただけでは絵巻物らしい和紙の質感を出せなくて。

富崎 他校の制作方法を参考に試行錯誤する中で、全面を白く塗り、その上から水で溶いたチョークを刷毛で重ねて乾かしたら、うまくいったんです。

長尾 翌朝見た時は、イメージ通りの色が出ていて感動しました！

館田 3つの時代を繋ぐ意味を持たせた雲も、試しにガーゼでチョークの粉を包んでチョークのようにポンポンとのせ、霧吹きをして定着させることを繰り返すと、下地が透けてふ

わふわとした雲らしい表現ができました。

富崎 絵巻物らしい平面的でシャープな線もなかなかチョークでは描けなくて、いろいろな案を出し合いました。

長尾 あれこれやってみて、厚紙を切り抜いた型紙をつくり、その部分だけ下地を拭き取るという方法にたどり着きました。

館田 専攻している油絵が自分との闘いなら、黒板アートは画材とのやりとり。トライ&エラーを繰り返して成功まで持っていく、その過程が楽しかったです。

長尾 5年間一緒に学んできたメンバーというの、よかったです。気が知れた仲だから遠慮なく相談できたし、意見も言い合えました。だから、いいアイデアも生まれた気がします。

館田 通常のプロジェクトは、監督の指示を受けて動くのが当たり前。ですが今回の黒板アートでは監督は置かず、お互いを信頼して作業を分担しました。

棚部 これも5年間の学びがあった



参加者4名

館田美玖

修士課程絵画専攻油画1年

×

棚部芹

修士課程絵画専攻油画1年

×

富崎美結

修士課程絵画専攻油画1年

×

長尾柚香

修士課程絵画専攻油画1年



Tateda Miku



Tanabe Seri



Tomisaki Miyu



Nagao Yuka

——プロジェクトに参加した動機は？

長尾 みんなで作業をすることが好きだからです。黒板に絵を描くと聞いて、特別な技術や経験がなくても挑戦できそうだなと思いました。

富崎 ひとつの絵をみんなで仕上げ、それを一般の人に見てもらえるなんてあまり経験できることではないので参加しました。

館田 大勢でひとつの作品をつくったことがなく、単純に面白そうだなと感じました。

棚部 黒板とチョークで実際にどんな絵が描けるのか知りたくて、やってみようと思いました。

——「金沢今昔行列絵巻」の発想や図案はどのように生まれたのですか？

棚部 全員で考えました。最初は私が昔の金沢の写真を使って何かできないかと提案したんです。

富崎 そこから、3枚の黒板を江戸、昭和、現代の時代で分けたら？時の流れを人で表して大名行列のように繋げたら？といったアイデアが次々とわきました。

からだと言えるかも。1年生の時
だつたら自主的に動くこともできず、
1週間でここまでの作品は完成でき
なかったでしょうね。

——作品のどこを見てほしいですか？

棚部 私は江戸時代を担当したので
すが、昔のものが今も大切に守られ
て金沢に残っていることを伝えたい
と思いました。

館田 昭和の絵には、金沢市内を
走っていた路面電車のほか歩く人の
髪型やファッションも時代に合わせ



て描きました。その辺りに気付いて
クスツと笑ってもらえたら。

富崎 現代の絵で表現したのは、性
別、年齢、国籍を問わずさまざまな
人が集まる金沢の変化や活気。自由
でのびのびとした雰囲気も意識しま
した。

長尾 全体の調整役もした私として
は、例え言葉が通じなくてもこの黒
板アートから金沢がいくつもの時代
を積み重ねてきた街だということを
感じてもらえたらうれしいです。

富崎 下絵段階では背景がさみしい
とか、歴史的な建物なども入れて金
沢を分かりやすく表現した方がいい
という意見もあつたんです。

棚部 検討しましたが、昔の絵は遠
近感がなくどれも同じ大きさで描か
れているので、背景の入れ方が難し
くて。

富崎 絵巻物を再現できなくなる位
ならと思いつて金沢城や兼六園と
いつたいいわゆる定番スポットをあえ
て描かず、大名行列を引き立てるこ
とにしました。

棚部 そのぶんやわらかい雰囲気を出
すためにパステル系を中心にする

など色選びを工夫しました。

棚部 持ち物や髪型といったディ
テールまで丁寧に描き、各時代の個
性や文化、暮らしぶりで金沢を表現
しました。人あつての金沢ですから
やはり人を主役にしたかったんです。

——プロジェクトを終えての感想は？

館田 普段は一人で制作しているの
で、話しかけられることが新鮮で。
ほめてもらった時はやはり素直にう
れしかったです。

長尾 「なつかしいわ」とか「こんな
髪型の人がいたわね」とか共感してく
れる人もいて。黒板アートがなけれ
ば話すこともない見ず知らずの人と
交流できたことが、想像以上に楽し
かったですね。

棚部 アートに興味がない人も目に
する作品をつくったことがあまりな
かったので、どうすればメッセージ
が伝わるかを考えながら制作したの
は初めてでした。これから地域連
携活動には積極的に参加しようと
思っているので、この経験は今後に
も生かしていきたいです。

長尾 自分の作品制作にも良い影響

があると感じています。最近では抽象
的なテーマばかり選んでいましたが、
久しぶりに人物を描いたことでまた
挑戦してみようかなという意欲がわ
きました。

富崎 この先、絵を続けても就職し
ても、チームでものづくりをするこ
とが基本になるので、共同制作の実
績ができ自信ができました。

館田 私はこのプロジェクトに参加
するまで、かつて金沢に路面電車が
走っていたことさえ知りませんでした。
黒板アート制作の目的は街の活
性化ですが、メンバー全員が金沢を
知り、人と交流できたことも成果の
ひとつだと思います。



黒板アート委託者 INTERVIEW

若い力を輝かせ 金沢に新しい文化の創造を



新保 博之 氏

金沢市 文化スポーツ局 担当部長
(兼)文化政策課 課長

いもありました。

街中にある小中学校の統廃合が進
む中、役目を終え捨てられてしまうも
のをうまく活用できないかと「みんな
の思い出黒板アート事業」はスタート
しました。材木町小学校で使われてい
た黒板をキャンパスに金沢らしさを
テーマにした絵を描き、その制作過程
から完成、お披露目、消すまで一連の
流れをアートとして発表。会場を市民
や観光客など多くの人が訪れる金沢駅
東もてなしドーム地下広場とすること
で、にぎわいの創出に繋がりたいと考
えました。また、この機会に学生の作
品を見てもらい、全国有数の芸術大学が
地元であり優秀な若者が頑張っている
ことを広く知ってもらいたいという願

プロジェクトの根幹となっているの
は、「伝統文化の継承・発展」と並んで
金沢市が進める「新しい文化の創造」。
美大生に表舞台で活躍する機会を提供
し、芸術や文化に親しむ人の裾野を広
げる狙いもあります。これまで5回制
作した黒板アートは、記念撮影をする
人もいるほど好評でしたし、第3回で
コラボレーションした金沢桜丘高校美
術部の生徒も、とてもよい刺激を受け
たようでした。自らテーマを設定し公
の事業に参加するという経験は、学生
にとっても貴重であり今後社会に出た
時必ずプラスになるはずです。これか
ら、金沢美術工芸大学の学生をはじめ
め若者の力を引き出す取り組みを通し
て、「文化都市・金沢」を発信する機会
を創出して行きたいと思っています。

黒板アート担当教員 INTERVIEW

美大生らしいアプローチで 黒板コミュニケーション



岩崎 純 氏

金沢美術工芸大学 油画専攻 准教授

昨年からは始まった「みんなの思い出
黒板アート」。5作目となる今回は、
これまでのイメージを一新する構図と
それを引き立たせる新しい技法を探求
した結果、アートが持つ「人に何かを
伝える力」をより強く感じられる作品
になりました。ホワイトボードやタブ
レットの登場で姿を消しつつある黒板
ですが、絵を描くことで新たなコミュ
ニケーションツールとして活用し、ひ
とつのアートにできたことはとても感
慨深いです。制作中は、海外からの観
光客に話しかけられ会話することもし
ばしばで、学生たちが大学生活の中で
培ってきた鋭い感性が「人に何かを伝
える力」となり、言葉を超えてさまざ

まな人に届いていることをうれしく、
そして頼もしく感じました。
このような発見や経験ができたの
は、公共の場所で制作をする機会をい
ただいたからこそ。誰かに見てもら
うことを前提に企画から制作、完成、そ
して黒板アートの特徴である消すまで
一連の流れを経験できる今回のような
取り組みは、学生たちにとってもつく
り手としての意識や思いをより強くさ
せる良い機会であり、さらなる成長に
繋がることでしょう。学生の素直な気
持ちや創作意欲を垣間見られるこの
プロジェクトは、個人的にも楽しみに
しており、この先も長く続くことを
願っています。10年、20年先に、今回
描いた時代絵巻のその後を、また黒板
アートで見ることができたら、と夢は
広がるばかりです。



黒板アート コレクション Since 2018▶



1	2
3	4
5	

Process 4

地域連携事業

ホスピタリティアート・プロジェクト「光の回廊」

1. 2018年8月・9月 油画専攻グループ
「金沢の四季」

2. 2018年9月 日本画専攻グループ
「海の中の宇宙(そら)」

3. 2018年10月 彫刻専攻グループ
「歴史の街・
金沢をアートで駆け巡る」

4. 2018年12月 金沢美大・金沢桜丘高校合作
「二本の川のある町(金沢)」

5. 2019年
「金沢今昔行列絵巻」

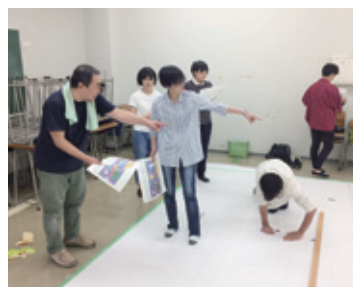
ホスピタリティアート・プロジェクト(HAP) 「光の回廊」制作過程

医療分野におけるアートの潜在的な可能性

金沢市立病院と金沢美術工芸大学との連携により、2009年から継続して行われているホスピタリティアート・プロジェクト(通称HAP)。そのひとつのプロジェクトである「光の回廊」は、病院1階の大ガラスに、患者、医療者、学生の協働によりステンドグラス風の装飾を施すワークショップ・展示企画です。成果物としての展示は医療環境に癒しの効果を与え、ワークショップによりアートを介したホスピタリティ(もてなし)空間を創出しています。



ワークショップ用のカラーセロファン



学内の作業

04 学内での下準備

ステンドグラス風装飾を施す原寸の大ガラスサイズは縦3.5m×横10m。決定した図案から原寸大の下絵を制作します。その原寸大の下絵をカラーパーツ別に切り、大ガラスに貼るセロファンの型紙にし、本番で貼るカラーセロファンを準備します。それと並行してワークショップ用のカラーセロファンも準備します。

05 「光の回廊」作業開始

市立病院での作業開始です。高所の作業もあるため、足場を組み、安全に留意し作業を進めていきます。大ガラス全面に保護シートを貼り、その上にカラーセロファンによる装飾をします。



06 作業最終日のワークショップ

市立病院での作業期間は3日間です。最終日のワークショップでは、患者、来院者、医療関係者の方々も作業に参加し、学生と共に作品の仕上げをします。



完成

参加者の協働により仕上げられた、ステンドグラス風装飾の完成です。作品は3週間程度の公開の後、撤収されます。晴れた日の午後2時頃には、カラーセロファンの色が床に美しく映り込み、「光の回廊」が立ち現れます。

01 ホスピタリティアート・プロジェクト 「光の回廊」始動

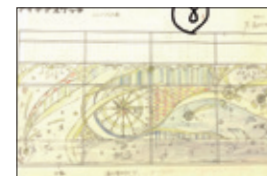
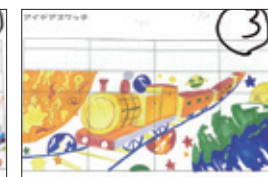
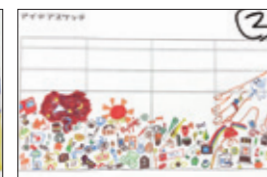
ホスピタリティアート・プロジェクトに参加する学生を募り、企画会議を行います。初めて参加するメンバーに向けて、コーディネーターの三浦賢治教授からホスピタリティアート・プロジェクトについて説明を受け、制作テーマについて意見交換をおこないます。また、その年のプロジェクトTシャツ制作担当を決めます。



チームとしての士気を上げるために
毎年お揃いのTシャツを作っています

02 図案の検討

どのような絵にするか参加者がアイデアを持ち寄り、全員の投票で本年度の図案を決めます。



2019年の集まったアイデアスケッチの一部

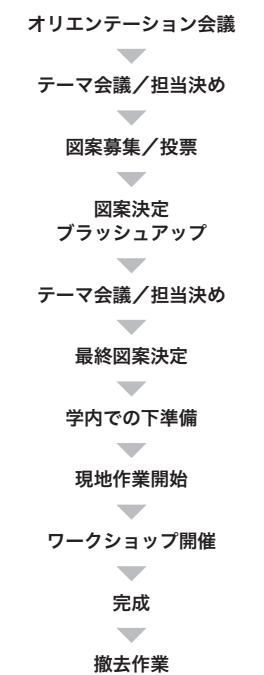
03 最終図案決定

図案が決まったら、実際の作業が可能か等について検討し修正作業を行い、最終図案が決定します。



2019年の決定図案

プロジェクトの流れ



ホスピタリティアートがもたらしたもの

2009年にスタートし、金沢市立病院との連携により医療環境におけるアートの潜在的な可能性を探り続けるホスピタリティアート・プロジェクト(HAP)。病院の待合いロビーの窓にカラーセロファンでステンドグラス風の装飾を施す「光の回廊シリーズ」制作に携わった5名に話を聞いた。

2019 ホスピタリティアート・プロジェクト
「光の回廊」参加者代表

INTERVIEW+

参加者代表5名

藤田真央 芸術学専攻1年
×
米田麻衣 油画専攻1年
×
石田彩夏 油画専攻3年
×
塚原由子 油画専攻4年
×
棚部芹 修士課程絵画専攻油画1年



Ishida Ayaka



Tsukahara Yuko



Tanabe Seri



Fujita Mao



Yoneda Mai



——1年生の2名は初参加でした。動機を教えてください。

米田 自分から積極的に活動するタイプではないのですが、大学生になったし何かやってみたいという気持ちもあって。高校生の頃、金沢市立病院で「光の回廊」を見たことがあり、いい機会だと思いました。

藤田 私はこのプロジェクトに参加するために入学したんです！高校3年生の時、大学案内でこの活動を知った時は、公立大学が地域と連携するというイメージがまったくなかったので新鮮でした。

——他のメンバーは昨年から続けての参加ですね。

棚部 入学当初から地域と繋がることや人と関わるのがしくて、「光の回廊」制作は今年で5回目。部活と違い毎年違う顔ぶれでよりよいものをめざすところが面白いです。

塚原 私は大学でしかできない経験をしたくて参加しました。他の地域連携プロジェクトにも携わりましたが、この取り組みは通院・入院の患

者さん、医療関係者、地域の方々など年代も置かれた立場も環境も異なるたくさんの人と触れ合うことができ、完成した作品も美しいので4年間続けています。

石田 就職用のポートフォリオにもなるからと軽い気持ちで始めて、今年で3年。継続の理由は、工作みたいな工程が楽しいから。あとは達成感の大きさですね。

塚原 ワークショップで感じるやりがいも原動力になっています。美術でみんなが笑顔になる瞬間に立ち合うなんて、そう何度も経験できることではありません。

——「宇宙旅行」というテーマや図案についての感想は？

米田 夢が広がる作品にしかなくて、なかなかできないことって何だろうと想着て、「宇宙旅行」をテーマにしました。

藤田 今までにないテーマとダイナミックな図案で、毎年作品を見ている人にも楽しんでもらえそうだと思います。

石田 ワークショップでは比較的小

さなモチーフをつくるので、参加者の作品が映えそうだなというのが第一印象でした。

塚原 宇宙というもうひとつの空間が窓辺に現れることで、いつもとは違う世界を感じてもらえる点もいいなと思いました。

——完成した作品を見た感想は？

米田 星やうさぎなど沢山のモチーフが増えて、私が考えた最初の図案よりずっといいものになりました。

塚原 もう覚えてしまいうくらい何度も見た図案なのに、たくさんの方の手が加わって完成した作品は、思いや温かさが伝わる決して美大生だけではつくれないものになっていました。

米田 ワークショップの参加者が楽しんでいる様子を見たり、喜ぶ声を聞いたりしているうちに、気がついていたら私もううれしい気持ちでいっぱいでした。

石田 想像していた以上の人がワークショップに参加してくれたこともあって、いろいろな人と交流しながら仕上げられたことが楽しかったです。自分の作品制作とは違う達成感もありました。

——プロジェクトを振り返って思うことはありますか？

棚部 いつもなら私は作者で皆さんは観客なのですが、その壁を取り払い一緒にものづくりをすることで新





しい視点が得られました。自分の制作がどう映るのか、今後どのような制作活動をすべきかなどを客観的に判断する材料を与えられた気がしています。

塚原 作品自体より病院という公共の場で制作をする経験や美大生以外の人と連携した過程が大切だと感じました。病院が日常の場所になり自由に出かけることもできない患者さんは、自分で心の動きをつくることでできません。美術にはそんな方々の世界を広げ、笑顔を引き出す可能性や役割があることも、一人で制作しているだけでは気付けなかったと思います。

藤田 実は以前、共同制作に挫折したことがあり、コンプレックスになっていました。しかし今回は純粹に楽しみながら活動できて、心が救われた気がしました。そして、自分でも人の役に立てたこと、誰かのために頑張れたことがとてもうれしかったです。この体験を咀嚼しながら、専攻する芸術学の学びに生かしていきたいです。

米田 周りの人を明るい気持ちにし、自分も楽しめるのがホスピタリ

ティアート。美術は楽しむものだということを改めて感じました。

石田 完成した作品は不揃いな所もあつたけれど、それがまた個性になってひとつの世界ができあがっていて感動しました。

棚部 私は卒業後も美術と地域を繋ぐことに関わりたいと思っており、将来のためにとっても意味のある学びができたと感じています。これまでの経験を生かしてアートが市民に伝わるきっかけを増やしていきたいです。

——今後の学生生活に生かせる発見などはありましたか？

米田 大学には美術を学びに来たのだからと学外での活動には消極的で、このプロジェクトへも何となく参加した面もあつたのですが、不安でもやってみることに、勇気を出して一歩踏み出す大切さに気付くことができました。

石田 美大生ばかりで制作するといふこだわりがでてしまいます。しかしワークショップでは、細かい部分はセロファンではなくマジックで仕上げるなど自分では考えもしなかった方法

がいくつも飛び出し良い刺激をもらいました。

誰もが笑顔になれる仕上がり、制作過程の雰囲気や携わった人の思いが作品に表れることも実感しました。

藤田 ご褒美はなく評価もされないのにもかかわらず、誰かの役に立てるってこんなに温かくて幸せな気持ちになるんですね。

棚部 この活動は、お金をもらわないから素の自分のできるんです。自分の行動への達成感や喜びを後ろ暗いところなく感じられることにも意味があるように感じます。

塚原 ホスピタリティアート・プロジェクトには、学内とは違う学びや発見があります。これからもぜひ続けてほしいです。

石田 学年が上がるにつれ忙しくな

るので、今年が最後かなと思いが毎年参加しています。高い志がなくとも、自分の制作に結びつかなくても、楽しいからまた心が動くのですね。

米田 経験しないと分からないこと、たくさんありますよね。私のように、軽い気持ちで参加してみるのもいいと思います。

ホスピタリティアート・プロジェクト (HAP) 委託者 INTERVIEW

心癒すアートの力を活かし よりよい医療を追求していく



横川 由起子 氏
金沢市立病院 副院長・眼科長

このプロジェクトが始まる前までは、病院でアート制作をする意義がよく理解できませんでした。しかし、患者様やお見舞いの方々はじめ、私たち職員も参加し学生と一緒に完成させたステンドグラス風の装飾を見上げて

いる姿に、誰もがいつもとは違う笑顔でいることに気付き、アートが持つ力を実感しました。学生にとっては、医療現場での制作は気を使うこともあるでしょう。また、日々業務に追われる職員にとってもプロジェクトへの参加が少なからず負担になることもありま

す。しかし、11年という長きに渡って継続できているのは、皆でひとつの作品をつくり上げること、心が満たされ

笑顔が増える喜びを経験しているから。患者、医師、看護師といった立場や職務を超えた会話が増え、より強い信頼関係が生まれることも治療に良い影響をもたらしています。

医療におけるアートの可能性は、すでに海外では広く認知されており、病院の評価基準のひとつになっているほど。心を豊かにすることで不安を払拭し治療効果を高めるという取り組みは、当院の高田重男院長が常々職員に伝えている「病気をみるのではなく、人をみなさい」という言葉とも重なります。これからの医療の在り方や病院の役割を考える上でもアートにできることはまだまだあると思われま

す。それを探す意味でも、このプロジェクトが次世代に引き継がれながら長く続くことを願っています。

ホスピタリティアート・プロジェクト (HAP) 担当教員 INTERVIEW

アートで提案する 医療現場でのコミュニケーション



三浦 賢治 氏
金沢美術工芸大学 油画専攻 教授

医療現場にアートを取り入れる取り組みは全国的に行われています。しかしホスピタリティアート・プロジェクトのように、医療機関と行政そして大学の協力関係がこれほどまとまっているのは稀です。11年間にわたり取り組みが継続しているのも恵まれた環境のおかげだと感じています。

このプロジェクトでは、患者と医療者、学生の関係が同じ立ち位置になります。その状況こそがすでにホスピタリティの在りようであり、ワークショップによる成果物よりも意味があると思っています。病院という場所柄、気付かないうちに誰かに不快な思いや負担をかけているかもしれません、学

生たちはそのことを理解しており、周囲に配慮した「静なる情熱」でことな接する姿勢が根付いています。

この取り組みは継続することが大切です。それは、参加する人の状況や感じ方が違うため、プロジェクトの意味やその結論もひとつではないからです。学生が、表現という問題について新たな視点を見出す機会になればいいですし、いつかこのプロジェクトのアーカイブが役に立つこともあるでしょう。既にこの活動は卒業論文のテーマとして取り上げられたり、小学校教諭としてHAPでの経験を生かしている卒業生もいます。誰がどのような意味付けをしてくれるのか楽しみです。今後も学生とともに、皆様に喜んでいただきながらこの活動に携わっていかれたらと思います。



地域連携活動「ホスピタリティアート・プロジェクト」の通称「HAP」ポーズ

社会連携センター歴代運営構成員名簿

2007 美術工芸研究所 所長：川本敦久
地域連携センター センター長：真鍋淳朗
地域連携センター：土井宏二／太田昌子／秋草孝／田中寛志／原智／小松崎拓男
産学連携センター センター長：中川衛
産学連携センター：石田陽介／寺井剛敏／浅野隆／米山央／伊藤英高／大谷正幸
コーディネーター：藤野雅

2008 造形芸術総合研究所 所長：川本敦久
地域連携センター センター長：真鍋淳朗
地域連携センター：土井宏二／太田昌子／後藤徹／田中寛志／原智／小松崎拓男
産学連携センター センター長：川本敦久
産学連携センター：鈴木浩之／石田陽介／寺井剛敏／浅野隆／米山央／伊藤英高
大谷正幸
コーディネーター：藤野雅

2009 造形芸術総合研究所 所長：川本敦久
地域連携センター センター長：真鍋淳朗
地域連携センター：土井宏二／太田昌子／後藤徹／田中寛志／城崎英明／小松崎拓男
産学連携センター センター長：川本敦久
産学連携センター：鈴木浩之／石田陽介／寺井剛敏／浅野隆／板橋廣美／伊藤英高
大谷正幸
コーディネーター：藤野雅

2010 社会連携担当理事：川本敦久
地域連携センター センター長：後藤徹
地域連携センター：佐藤俊介／中瀬康志／水野さや／角谷修／板橋廣美
産学連携センター センター長：浅野隆
産学連携センター：石田陽介／寺井剛敏／鏑隆弘／原智／伊藤英高
コーディネーター：藤野雅

2011 社会連携担当理事：川本敦久
地域連携センター センター長：後藤徹
地域連携センター：高橋治希／中瀬康志／山崎剛／鈴木康雄／畠野裕司／板橋廣美
産学連携センター センター長：浅野隆
産学連携センター：荒木恵信／石田陽介／寺井剛敏／河崎圭吾／宮永春香／中安翌
コーディネーター：藤野雅
アートベース石引アドバイザー：角谷修

2012 社会連携担当理事：川上明孝
企画総務担当理事：大路孝之
社会連携担当教育研究審議会委員：寺井剛敏
地域連携センター センター長：角谷修
地域連携センター：高橋治希／中瀬康志／北村賢哉／板橋廣美／大野悠
産学連携センター センター長：浅野隆
産学連携センター：石田陽介／坂野徹／河崎圭吾／畠野裕司／大高亨
コーディネーター：藤野雅
アートベース石引アドバイザー：角谷修

2013 社会連携担当理事：川上明孝
企画総務担当理事：大路孝之
社会連携担当教育研究審議会委員：寺井剛敏
地域連携センター センター長：角谷修
地域連携センター：高橋治希／中瀬康志／北村賢哉／板橋廣美／大野悠
産学連携センター センター長：浅野隆
産学連携センター：石田陽介／坂野徹／河崎圭吾／畠野裕司／大高亨
コーディネーター：藤野雅

2014 社会連携担当理事：村中稔
地域連携センター センター長：真鍋淳朗
地域連携センター：よしだぎょうこ／高橋治希／中瀬康志／鈴木康雄／北村賢哉
大高亨
産学連携センター センター長：角谷修
産学連携センター：佐藤俊介／坂野徹／河崎圭吾／畠野裕司／山本健史
コーディネーター：藤野雅

2015 社会連携担当理事：村中稔
地域連携センター センター長：真鍋淳朗
地域連携センター：高橋治希／中瀬康志／鈴木康雄／北村賢哉／池田晶一
産学連携センター センター長：角谷修
産学連携センター：佐藤俊介／坂野徹／根来貴成／畠野裕司／山本健史
コーディネーター：古場田良郎

2016 社会連携担当理事・社会連携センター センター長：寺井剛敏
地域連携部門 部門長：河崎圭吾
地域連携部門：佐藤俊介／真鍋淳朗／三浦賢治／鈴木康雄／坂本英之／畠野裕司
山本健史
産学連携部門 部門長：浅野隆
産学連携部門：荒木恵信／北村賢哉／大高亨／稲垣健志／村山祐子
知財管理部門 部門長：村中稔
知財管理部門：鈴木浩之／根来貴成／原智／高橋明彦
特任研究員：古場田良郎

2017 社会連携担当理事・社会連携センター センター長：寺井剛敏
地域連携部門 部門長：河崎圭吾
地域連携部門：佐藤俊介／真鍋淳朗／芝山昌也／工藤俊之／坂本英之
青木千絵
産学連携部門 部門長：浅野隆
産学連携部門：荒木恵信／北村賢哉／大高亨／稲垣健志／村山祐子
知財管理部門 部門長：村中稔
知財管理部門：鈴木浩之／根来貴成／原智／高橋明彦
特任研究員：野村昌史

2018 社会連携担当理事・社会連携センター センター長：石田陽介
地域連携部門 部門長：池田晶一
地域連携部門：芝山昌也
産学連携部門 部門長：畠野裕司
産学連携部門：加賀城健
知財管理部門 部門長：安島諭
知財連携部門：鈴木浩之
特任研究員：野村昌史

2019 社会連携担当理事・社会連携センター センター長：石田陽介
地域連携部門 部門長：池田晶一
地域連携部門：芝山昌也
産学連携部門 部門長：畠野裕司
産学連携部門：加賀城健
知財管理部門 部門長：安島諭
知財連携部門：鈴木浩之
特任研究員：野村昌史



2009 生命の樹



2010 夢の水族館



2011 オアシス



2012 バレード



2013 夏の想い



2014 南からの風



2015 夢の発掘



2016 夏の冒険



2017 くまさんの夏休み



2018 四季のかがやき



2019 月面旅行

ホスピタリティアート・プロジェクト「光の回廊」コレクション Since 2009▶

2015

地域連携064>>>079

064 障害者支援施設「希望が丘」における陶芸活動／065 金沢市企業局「ガスぼーと」ロゴデザイン／066 金沢マラソン完走メダルデザイン制作／067 首都圏における総合的なプロモーションを展開するための北陸新幹線金沢開業PRポスター制作／068 金沢の食文化の魅力を発信するための映像制作「ごちそうオノマトペ」／069 北陸経済連合会スローガン、ロゴマーク制作／070 ホスピタリティラウンジ・プロジェクト 待ち時間を豊かにする椅子Ⅳ・Ⅴ「石川県立音楽堂と新幹線ホームをつなぐ椅子」／071 かなざわエコライフキャンペーン ダンボールエコアート出展事業／072 兼六小学校校章デザインとその活用計画／073 ホスピタリティアート・プロジェクト 第18回 光の回廊シリーズ(その7)「夢の発掘」ワークショップ・作品展示／074 ホスピタリティアート・プロジェクト第19回 第4回ホスピタル・ギャラリー 一病院が美術館になる日「安らぎのいろ・かたち・味わい」／075 北陸銀行 ウィンドウおよび店舗 作品展示／076 問屋まちスタジオにおける活動 問×美 2015 JOINT／077 アートベース石引における展示活動／078 人工衛星を利用した地上絵の制作研究／079 「金沢百万石まつり」スタッフTシャツデザイン



077 アートベース石引における展示活動



079 「金沢百万石まつり」スタッフTシャツデザイン



075 北陸銀行 ウィンドウおよび店舗 作品展示

2015

産学連携075>>>086

075 組み合わせ方で中身が引き立つ容器／076 「カナコレ！」BLE ビーコンを活用した、大学内で利用する画像シェアサービスの開発／077 日本の伝統要素を取り入れた「BLE ビーコン」を納めるケース製作／078 大野市まいたけキャラクターのデザイン開発／079 コンパクトカーの内外装アイテム提案／080 ロフト金沢店 オープニング壁面ディスプレイ企画・制作／081 新しい価値を持ったメガネのデザイン／082 北陸デスティネーションキャンペーン「北陸 STANDARD+」／083 人間中心の地域社会を実現するIoT (Internet of Things) に関する研究／084 キリンビバレッジ新商品企画の提案／085 ローンカードなどのデザイン企画／086 30代家族が住みたくなる戸建住宅の提案



086 30代家族が住みたくなる戸建住宅の提案



082 北陸デスティネーションキャンペーン「北陸 STANDARD+」

2016

地域連携080>>>095

080 金沢マラソン2016 完走メダルデザイン／081 四日市こども科学セミナー 人工衛星と電波反射器を利用した地上絵の制作／082 新天地商店街まちなか美術館に関する作品展示および路上アート／083 泉野図書館・金沢美術工芸大学共同企画 10周年記念展「ことば 前期展 後期展」／084 ホスピタリティアート・プロジェクト第20回 光の回廊シリーズ(その8)「夏の冒険」ワークショップ・作品展示／085 ホスピタリティアート・プロジェクト第21回 第5回ホスピタル・ギャラリー 一病院が美術館になる日「安らぎのいろ・かたち・味わい」／086 小学生と高齢者の交流促進のための「ものづくり方法」の研究／087 金沢市立安江金箔工芸館 ウィンドウディスプレイ企画・デザイン／088 おもてなし気運醸成に関する広報物の企画・デザイン等の提案(食文化)／089 三大都市圏等における総合的なプロモーションを展開するための誘致ポスター制作／090 金沢21世紀工芸祭 工芸回廊／091 ホスピタリティ・ライブラリープロジェクト図書館で過ごす時間を豊かにする椅子 ～金沢海みらい図書館を舞台に考察～／092 かなざわエコフェスタ2016出展事業／093 石川県立盲学校「触れてみる彫刻展」／094 金沢の森育推進事業における絵本「森のめぐみと動物たち」の制作／095 アートベース石引における展示活動



081 四日市こども科学セミナー 人工衛星と電波反射器を利用した地上絵の制作



080 金沢マラソン2016 完走メダルデザイン

2016

産学連携087>>>097

087 金沢アートガイドアプリの企画・制作／088 スマートデバイスを活用した新しいサービスの開発 新感覚サイネージ「ルクホ ～囲んで見つけるマップ～」位置情報連動型アプリ「ワザトレ ～冒険心をくすぐる修行アプリ～」／089 サプライズのある容器／090 兼六園グッスのデザイン研究／091 新しい価値を持ったメガネのデザイン／092 IoT機器の操作インターフェイスデザインの研究／093 OLED パネルの特徴を活かした未来の光の研究／094 これからの暮らしとエクステリア空間／095 金沢フォーラス クリスマスツリーデザインプロジェクト／096 IoT時代における UX(user experience)を基軸としたサービス＆プロダクトデザイン開発プロジェクト／097 志賀町イルミネーション事業における提言



095 金沢フォーラス クリスマスツリーデザインプロジェクト



089 サプライズのある容器

2017

地域連携096>>>106

096 金沢マラソン2017 完走メダルデザイン制作／097 湯涌温泉開湯1300年ラッピングバスデザイン提案／098 ホスピタリティ・ライブラリープロジェクト 図書館で過ごす時間を豊かにする椅子Ⅱ ～金沢海みらい図書館を舞台に考察～／099 JAPANテント30周年記念Tシャツ基本デザイン制作／100 ホスピタリティアート・プロジェクト第22回 光の回廊シリーズ(その9)「くまさんの夏休み」ワークショップ・作品展示／101 ホスピタリティアート・プロジェクト第23回 第6回ホスピタル・ギャラリー 一病院が美術館になる日「安らぎのいろ・かたち・味わい」／102 金沢市観光ポスター制作／103 「金沢の食の名工」映像制作／104 ITビジネスプラザ武蔵サロン展示／105 まちかど思い出ピアノのデザイン制作／106 金沢市立安江金箔工芸館 ウィンドウディスプレイを充実させるためのデザイン提案



100 ホスピタリティアート・プロジェクト第22回 光の回廊シリーズ(その9)「くまさんの夏休み」ワークショップ・作品展示

2017

産学連携098>>>113

098 次世代の暮らしに沿った機能美を感じるドアデザイン提案／099 新しい価値を持ったメガネフレームのデザイン研究 美大メガネ部活動としての連携事業／100 建築3次元CAD(建築設計向けソフトウェア)用ロゴマークデザイン開発／101 ユニバーサルデザインを使った観光案内ツールの開発／102 企業とプロのデザイナーを交えた新しい授業の枠組みによるIoT商品開発研究／103 未来の車両内装(センターゾーン)から考える新アイテムの提案／104 パスシート生地用テキスタイルデザイン開発／105 小松精練バスシートカタログデザイン制作／106 石川テレビキャラクター制作／107 SNSを活用したハロウィンイベント空間とワークショップのデザイン研究／108 香林坊東急スクエアにおける駐輪スペースの研究／109 かなざわエコフェスタ2017出展／110 卒業制作作品「施設向け歩行車 Snuggle」の製品化／111 ANAクラウンプラザホテル金沢 クリスマスオーナメント制作／112 「AEON MALL ART SCENE 見る名画 感じるアート 楽しむ美術展」の空間表現研究／113 有機EL照明パネルを使用したポータブルライティングのデザイン研究



104 パスシート生地用テキスタイルデザイン開発



101 ユニバーサルデザインを使った観光案内ツールの開発



110 卒業制作作品 「施設向け歩行車 Snuggle」の製品化



107 SNSを活用したハロウィンイベント空間とワークショップのデザイン研究

2018

地域連携107>>>127

107 金沢マラソン2018完走メダルデザイン制作／108 かなざわ時計／109 歩けるまちアートベンチプロジェクト「かなざわ道の船」～ベンチのデザイン制作と情報発信事業～／110 みんなの思い出 黒板アート／111 まちかど思い出ピアノのデザイン制作／112 「金沢テクノパーク」企業立地ガイドのデザイン／113 金沢駅西地下広場庭園リニュアル／114 WRO Japan 2018 in Kanazawa 参加記念メダルデザイン制作／115 金沢の海の幸PR映像「海鮮金沢」映像制作／116 ホスピタリティアート・プロジェクト第24回 光の回廊シリーズ(その10)／117 ホスピタリティアート・プロジェクト第25回 第7回ホスピタルギャラリー／118 かなざわエコフェスタ2018／119 ホスピタリティ・ライブラリープロジェクト 図書館で過ごす時間を豊かにする椅子Ⅲ ～金沢海みらい図書館を舞台に考察～／120 JAPAN TENT Tシャツ・広報物デザイン／121 犀校小学校校章デザインとその活用計画／122 犀川小学校校章デザインとその活用計画／123 金箔箔を用いたパネル等の制作及びSNSによる情報発信の提案／124 子ども専用相談ダイヤルカードのデザイン／125 社会福祉法人 希望が丘での陶芸指導および薪窯焼成／126 石川県立盲学校「触れてみる彫刻展」／127 外国人旅行者銭湯体験推進事業



114 WRO Japan 2018 in Kanazawa 参加記念メダルデザイン制作



110 みんなの思い出 黒板アート

2018

産学連携114>>>121

114 これからのエンターテインメント 授業の枠組みから捉え直したプロジェクト／115 スズキの〇〇があるからできるこんなこと／116 真空成形の技術を使った新たなユニバーサルデザイン容器の研究／117 新しい紙コミュニケーションツールのデザイン開発／118 クラスコ共同事業 金沢市内のホテル・リノベーションにおける客室と共用部のデザイン／119 卒業制作作品「施設向け歩行車 Snuggle」の製品化(2年目)／120 新しい価値を持ったメガネフレームのデザイン研究 美大メガネ部活動としての連携事業／121 ハロウィンカーニバルに関するイベントデザイン研究



114 これからのエンターテインメント 授業の枠組みから捉え直したプロジェクト

117 新しい紙コミュニケーションツールのデザイン開発



017 金沢中央卸売市場改装プロジェクト

2011

地域連携 012 >>> 018

012 双頭の獅子頭、平成の加賀獅子の制作 一伝統行事等地域交流研究事業ー／013 小矢部川サービスエリア(上り)2014年改築を前提とした「北陸らしさ」を演出するサービスエリアのデザイン／014 フォーラス KANAZAWA COOL 作品展示／015 「珠洲焼普及・啓蒙」振興プロジェクト2011 研究テーマ「SURIBACHI」／016 アートベース石引／017 金沢中央卸売市場改装プロジェクト／018 金沢の商業施設におけるファッション修了制作作品の展示販売



018 金沢の商業施設におけるファッション修了制作作品の展示販売

2011

産学連携 035 >>> 041

035 iPhone対応アプリ開発プロジェクト「モバイルフォンスター／何か YO! 怪?」／036 産地ブランド・THE291のフレームデザイン／037 新商品開発に向けた企画提案について／038 能登珪藻土ビザ窯のデザイン／039 車内天井材パターンデザイン開発／040 iPhone用ゲームアプリケーション「ねこたつ」開発／041 真空成形の魅力を最大限に活かした新デザインの提案



035 iPhone対応アプリ開発プロジェクト「モバイルフォンスター／何か YO! 怪?」

040 iPhone用ゲームアプリケーション「ねこたつ」開発

2012

地域連携 019 >>> 033

019 女性の健康サポートBOOKのデザイン／020 禁煙ステッカーのデザイン研究／021 原付ナンバープレートデザイン／022 鈴木大拙館ミュージアムグッズ開発／023 「珠洲焼普及・啓蒙」振興プロジェクト2012 研究テーマ「炎のかたち」／024 アート de マナーアップ(ガラスアート装飾)／025 下水道のイメージアップを狙ったマンホール蓋のデザイン／026 かなざわ燈涼会 浅野川工芸回廊／027 北陸銀行ウィンドウ(小立野、中央、問屋町各支店)活用計画／028 金沢歌劇座開館50周年記念 新作日本語オペラ ラジオスターレストラン 一星の記憶ー(金沢ジュニアオペラスクール公演2012)舞台衣装、小道具の研究制作／029 おしゃれメッセ2012 ポスターデザイン／030 金沢美術工芸大学大学院ファッションデザインコース2013修了制作作品展 in FORUS 金沢の商業施設におけるファッション修了制作作品の展示販売／031 授産商品開発事業「こびとかばサブレ」／032 ホスピタリティアート・プロジェクト第12回 光の回廊シリーズ(その4)「パレード」／033 ホスピタリティアート・プロジェクト 一待ち時間を豊かにする椅子Ⅰ・Ⅱー



031 授産商品開発事業「こびとかばサブレ」

2012

産学連携 042 >>> 054

042 「国宝 平等院鳳凰堂内 西面屏絵 日想観」の学術的復元模写による保存に関する研究／043 産地ブランド THE291メガネフレームのデザイン開発／044 工事用仮囲いフェンスのグラフィックデザイン／045 バイオトイレの内外装デザインの提案／046 反射材を利用した新しい用途開発の提案／047 圧縮杉材を用いたテーブルのデザインの研究／048 高級感のある車内装デザインの研究／049 車内装材における加飾パターンの提案／050 真空成形の魅力を最大限に活かしたデザインの提案／051 「金沢の水」クラフト手まりのリーフレット及びパッケージ等のデザイン研究／052 詰め替え容器から考えるユニバーサルデザイン／053 エネルギーの可視化の研究／054 iPhone用ゲームアプリケーション「にゃんぐらむ」「にゃんびき」開発



046 反射材を利用した新しい用途開発の提案



047 圧縮杉材を用いたテーブルのデザインの研究



044 工事用仮囲いフェンスのグラフィックデザイン

2013

地域連携 034 >>> 052

034 金沢美術工芸大学大学院ファッションデザインコース2014修了制作作品展 in FORUS 金沢の商業施設におけるファッション修了制作作品の展示販売／035 千枚田ポケットパーク整備計画／036 授産商品の商品力アップ支援事業／037 ベーカリーワゴン「汽車のパン屋さん ぽっぽ」／038 つくる図書館／039 かなざわピンクリボンプロジェクト／040 かなざわ燈涼会2013 浅野川工芸回廊／041 能登島「ガラスの丘」プロジェクト2013～風とガラスのプロムナード～／042 いじめ防止ポスター制作／043 ホスピタリティラウンジ・プロジェクト 待ち時間を豊かにする椅子Ⅲ「石川県立音楽堂と新幹線ホームをつなぐ椅子」／044 小松駅前シンボルアートコンベン／045 かなざわクラフトマルシェ出展計画／046 ホスピタリティアート・プロジェクト 第14回 光の回廊シリーズ(その5)「夏の想い」／047 石引商店街バナーフラッグデザイン／048 株式会社金沢商業活性化センターⅥ制作／049 北陸銀行ウィンドウ活用計画2013(小立野、中央、問屋町各支店)／050 かなざわエコフェスタ2013出展事業／051 和紙の恐竜クラフト／052 珠洲市公用車(EV車)のラッピングデザイン



038 つくる図書館



052 珠洲市公用車(EV車)のラッピングデザイン

2013

産学連携 055 >>> 064

055 メガネフレーム、サングラス、老眼鏡などのデザイン開発／056 真空成形の魅力を最大限に活かした新デザインの提案／057 珪藻土バスマットのパターンデザインの提案／058 これからの通信販売用パッケージデザイン／059 CO₂排出抑制効果を有する循環型素材であるバイオマス由来の環境配慮型プラスチック「テラマック」を用いたプロダクツの提案／060 新しいロードベスの在り方ー普段でも着用出来る安全ベストのデザイン提案ー／061 北陸新幹線車内販売ワゴンのデザイン・製品開発／062 「金沢の水」クラフト手まりシュリンクラベル等の新デザイン／063 各車型チームによる新しい内装デザインの提案／064 素材を意識した新しい加飾提案



062 「金沢の水」クラフト手まりシュリンクラベル等の新デザイン

2014

地域連携 053 >>> 063

053 のと鉄道 笠師保駅 リニューアルプロジェクト／054 金沢市立病院 西病棟水回り空間創生事業／055 金澤町家プレート設置事業計画／056 日本乳がんピンクリボン運動の各種デザインの提案／057 金沢の食文化の魅力を発信するための広報企画の提案・制作／058 新幹線開業気運醸成に関する広報物の企画・デザイン等の提案・制作／059 ホスピタリティアート・プロジェクト 第16回 光の回廊シリーズ(その6)「南からの風」ワークショップ・作品展示／060 都心軸沿道における装花のデザイン／061 片町A地区市街地再開発事業工事における仮囲いの装飾デザイン制作／062 金沢エコフェスタ2014エコアート出展事業／063 北陸銀行ウィンドウおよび店舗 作品展示



062 金沢エコフェスタ2014エコアート出展事業



053 のと鉄道 笠師保駅 リニューアルプロジェクト

2014

産学連携 065 >>> 074

065 金沢アートガイドアプリの企画・制作／066 「国宝 平等院鳳凰堂内 西面屏絵 日想観」の学術的復元模写による保存に関する研究／067 「アルコール離れした若者に日本酒を飲ませる新しいパッケージデザイン」の提案／068 水引細工を生かしたお土産商品の提案／069 「大野市まいたけパッケージ」デザインの提案／070 新しい価値を持った眼鏡のデザイン／071 バイオトイレカー景観向上のためのデザイン研究／072 兼六園ガイドユニフォーム・デザインプロジェクト／073 北陸新幹線開業を祝したデザインの提案(金沢フォーラス)／074 伊勢丹ジャパンセンシズキャンペーン宣伝演出の研究



072 兼六園ガイドユニフォーム・デザインプロジェクト



073 北陸新幹線開業を祝したデザインの提案(金沢フォーラス)



071 バイオトイレカー景観向上のためのデザイン研究



068 水引細工を生かしたお土産商品の提案



003 団塊世代へ向けての新しいサポーター企画提案

2007

産学連携 001 >>> 010

001 金沢オリジナルネクタイデザイン制作／002 1Seg.Digital TV Phone Design／003 団塊世代へ向けての新しいサポーター企画提案／004 会社向けポータル情報システムの画面デザインの検討／005 地域ブランド・丸いも焼酎「のみよし」ラベルデザイン／006 産地ブランド・THE291のフレームデザインの研究／007 電力と生活のデザイン／008 工芸素材を利用した製品デザインのデータ作成／009 輪郭抽出機能を利用した昔話(童話)コンテンツにおける研究／010 大学生をターゲットとしたauブランド携帯電話の広告制作



005 地域ブランド・丸いも焼酎「のみよし」ラベルデザイン



010 大学生をターゲットとしたauブランド携帯電話の広告制作



002 1Seg.Digital TV Phone Design



006 産地ブランド・THE291のフレームデザインの研究



019 まほうびんのデザイン

2009

産学連携 017 >>> 022

017 色弱者に配慮したカラーユニバーサルデザイン／018 次世代プレス機のデザイン／019 まほうびんのデザイン／020 産地ブランド・THE291のフレームデザインの研究／021 新設住宅用次世代居室(リビング・ベッドルーム)照明器具のデザイン／022 現代の印籠シリーズ開発プロジェクト



022 現代の印籠シリーズ開発プロジェクト



018 次世代プレス機のデザイン



021 新設住宅用次世代居室(リビング・ベッドルーム)照明器具のデザイン



020 産地ブランド・THE291のフレームデザインの研究

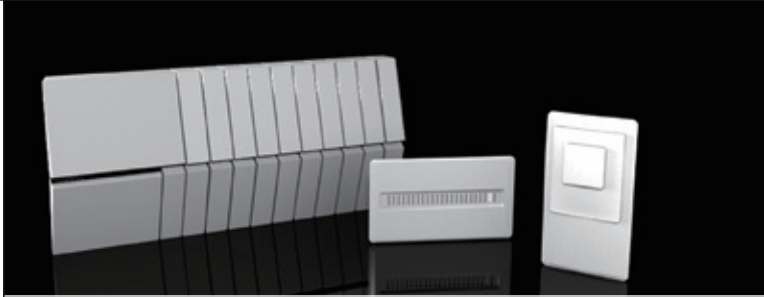
2008

産学連携 011 >>> 016

011 小矢部市バスカラーデザイン／012 電力と生活のデザイン／013 産地ブランド・THE291のフレームデザインの研究／014 九谷焼の新しいデザインの研究／015 カーシートテキスタイルのデザイン提案／016 プラスチック生活用品のデザイン



015 カーシートテキスタイルのデザイン提案



012 電力と生活のデザイン



016 プラスチック生活用品のデザイン

2010

地域連携 001 >>> 011

001 地域連携を深めるためのサービスエリアにおける空間デザインとサインデザイン／002 フォーラス KANAZAWA COOL 作品展示／003 金沢中央卸売市場改装プロジェクト／004 「金沢そだち」認証マークデザイン／005 金沢産スギ間伐材 割り箸袋デザイン／006 かないわ香箱がにブランド化に伴うロゴマーク&ポスターの制作／007 珠洲焼復興プロジェクト 知らなかった珠洲焼の魅力・みんなで創ろう珠洲焼／008 珠洲寺家塩津上野地区のキリコ絵のデザイン及び制作 ー大学コンソーシアム石川地域課題研究ゼミナール支援事業ー／009 かなざわ燈涼会 浅野川工芸回廊／010 広坂ライトプロジェクト「むつのはな」～冬の広坂に届く、光の贈り物～／011 金沢エコ推進事業者ネットワークシンボルマークデザイン制作



005 金沢産スギ間伐材 割り箸袋デザイン



006 かないわ香箱がにブランド化に伴うロゴマーク&ポスターの制作



002 フォーラス KANAZAWA COOL 作品展示



014 九谷焼の新しいデザインの研究



011 小矢部市バスカラーデザイン



033 ヤマト醤油味噌新商品「こうじみそ」パッケージデザイン制作



030 ロフトランドクラッチのデザイン研究

2010

産学連携 023 >>> 034

023 カーシート素材のテキスタイルデザイン研究開発／024 メガネフレーム、サングラス、老眼鏡などのデザイン開発／025 小学校向けエネルギー監視システムのコンテンツ・デザイン開発／026 単科大学の協調学習のための新しいデスクの研究及びデザイン／027 戸建住宅外壁面・意匠研究共同プロジェクト／028 「緒つつみ和紙」メッセージカバーデザイン提案／029 能登珪藻土製品のデザイン／030 ロフトランドクラッチのデザイン研究／031 車内天井材のテキスタイルデザイン開発／032 移動式有料駐輪場(無人対応型)のデザイン／033 ヤマト醤油味噌新商品「こうじみそ」パッケージデザイン制作／034 「金沢の水」ボトルデザイン研究

金沢美術工芸大学

KANAZAWA COLLEGE OF ART

〒920-8656 石川県金沢市小立野5丁目11番1号
TEL:076-262-3531 FAX:076-262-6594

発行／公立大学法人 金沢美術工芸大学
発行日／2019年12月

本書の全部または一部を無断で複写・複製することを禁じます。



History 248

社会連携センターのあゆみ 2007-2018

